

社会福祉学科のこれからの歩みの上に見えざる御手のお導きが豊かにありますようお願い申し上げます。

社会福祉学科二〇周年記念に寄せて



野口 幸弘(元教授)

社会福祉学科の二〇周年記念まことにめでたくございます。学科開設当初から一七年間勤務した私としましても大きな節目に感慨深い思いをしております。

退職してからは、関心があった知的、発達障害の福祉現場に再就職しました。その中で改めて、社会福祉の仕事は、社会関係の問題を補充すること(対人援助)を目的としていること、社会生活上で困難を抱える個人(児童・障害者・高齢者)や集団(当事者組織)と社会資源(政治・行政)を適切に結びつける機能を持っていることを強く感じています。

また福祉現場で活躍している本学卒業生との再会も喜びの一つとなっています。西南学院大学人間科学部社会福祉学科は、九州一円の福祉業務の根幹をなす社会的努力を發揮できる人材養成機関として大切な役割を担っているのだとしみじみ振り返っています。

これからも西南学院大学人間科学部社会福祉学科に関わる関係者の皆が良好なチームワークを形成して地域福祉の活性化と充実に貢献でき

ることを願っております。

(福岡障がい者支援センター理事長)

今でも私の心に焼きついている学生の言葉



小林 隆児(元教授)

西南学院大学に職を得て八年間を過ごした私だが、講義や演習で学生たちと語り合い、今でも私の心に焼きついている彼らの言葉は少なくない。専門知識を教授することに傾きがちな大学教育で、私は彼らの感性に問いかけることに力を注いだ。母子交流の映像を供覧する中で学生たち自身の気づきに感動することが多かった。その中の一人である。幼少期から親子関係の葛藤に苦しみ続けた彼女が私の講義を通して「自らの心に潜むアンビバレントな思いを自覚し、今まで自らを押しつけてきた思い込みや葛藤から脱出する糸口を掴んだ」と述べ、「(それまでは)いつも悪者捜しをしていた。私がダメな理由の責任を押し付ける先を探し、自分自身と向き合っていなかった」という。しかし「この受け入れは正直死ぬほどつらかった」とも吐露していた。私が大学で目指しかつ学生に期待したのは「教えられる」学びではなく「気づく」学びだったということである。